

星屑チーズケーキ

カフェから始まる物語 2



作：はるゆき

日曜日の昼下がり。私「山戸留美」はこの心置きなく羽を延ばせる時間、お気に入りの小説を誰にも邪魔されることなく読み耽っている。傍らには大好きなチーズケーキとコーヒー。この上ない幸せなひとときだ。

私の座っているテーブルの近くには華やかな、恐らく女子大生のグループがキャッキヤと恋愛談義に花を咲かせている。

(あのこたちは苺系のケーキかな)

テーブルをみると予想通り、ショートケーキ、フルータルト、フランボワーズムースなど色鮮やかなケーキが並んでいる。その隣のパソコンを叩いている女性の前にはティラミスだ。確かイタリア語で「私を元気づけて」という意味だった。休日も仕事をしている自分を励まそうとあのケーキを選んだのかしら。

もちろんこれは全て私の頭の中の想像に過ぎない。でも何となく当たっているようなときがあって楽しいのだ。ちなみに自分が何を選んだかといえば――チーズケーキ。

そう。これが私の断固として譲れない、マイ・ベスト・セレクション・フォーエバー。あの飾り気のない見た目。どの角度でフォークを入れても倒れにくい安定感。そしてフルーツ系ケーキにありがちな「苺ゾーン」「キュウイゾーン」などの当たり外れ感のなさ。これが、私が一重にチーズケーキを愛する理由である。(ちなみに、レアとベイクドのどちらか選べといわれたら、悩みに悩むがベイクド派だ)このケーキに象徴されるような心にさざ波が立つことない<平凡な日常>。これが私の目指す理想の日々である。

明日からまた新たな一週間が始まるが、来週提出予定の課題はすっかり片付けてある。今日も家に帰って早めに布団に潜り込めば、余裕を持って月曜日の朝を迎えることができるだろう。「常に先を考える」これは平凡な日常を送るための重要な要素だ。

私はケーキをフォークで切り取ると口に運んだ。口の中にじんわり広がるチーズ感を楽しみながら、再びミステリ小説の世界に入りこむ。

ストーリーは現代に生きる探偵が、あろうことか中世ヨーロッパの世界に飛ばされて、巻き込まれて行く事件に四苦八苦しながらも、なんとか解決に導こうとするお話だ。伏線の張り巡らされた物語に私はすっかりはまってしまっているのだった。

店内は日曜の午後をのんびり過ごしたいお客さん達でいっぱいだ。カップルやグループの中、私のようなお一人様も何人かいる。このカフェでは相席はごく普通に行われていて、私より先に来ていたパソコン作業中の女性の向かいには、既に初老の男性が座っている。

(次にお一人様が来たら私のところだな)

頭の隅でちらっと考えていると、店員がこちらにくるのが視界に入った。

「お客様。大変申し訳ないのですが席が混み合っておりまして。相席宜しいでしょうか」

「構いません」と答えると、店員はお辞儀をして慌ただしく去って行く。私はケーキとコーヒーを自分の方に引き寄せてから、再び本の世界に没頭した。

店員はすぐにお客を案内してきた。どうやら若い男性のようだ。腰を下ろすやいなや、腕に抱えていた大きな紙袋をドサッとテーブルの真ん中辺りに置いた。やたら重そうな音だったので、私は何となく気になってしまった。紙袋の影から相手に気付かれないように盗み見ると、彼は慎重に中身を取り出し始めた。

――本だ。

それも一冊や二冊ではない。一体何冊の本が入っているのか、つつい取り出されるリズムに合わせて数えてしまった。彼はどうやら理系らしい。電気工学、宇宙、星、科学、数学、ロボットについてなどなど。大小合わせて合計十三冊。テーブルの中心に立派な本のタワーができた。ペシャンコになった袋はすっかりくたびれてクシャクシャになっている。彼はそれを無造作に丸めようとしたが、文庫が一冊残っていたらしい。ポン、と最後にタワーの最上階に積み上げられたそれはなんと、

「あ……」

それは、偶然にも私が今夢中になって読んでいたものと同じ小説だったのだ。思わず声が出てしまい、慌てて顔を伏せたが時既に遅し。彼は私に見られていたことに気がついた。

「すみません、すぐにどかしますんで」

がたいのわりに小さな声で謝ってくる。そのとき彼も私の手元にある本の表紙に気がついた。

「「……」」

なんとも言えない沈黙。私は内心、それほど有名なわけではないその小説を彼が持っていたことに少なからず感動していた。そしてそれは、見たところ彼も同じようであった。

「初めて会いました。この本読んでいる人に」

ともすれば若干ナンパを仕掛けているともとれる台詞を私が言うと、彼は照れくさそうに視線を落としながら、俺もですよ。と答えてくれた。その笑顔を見たとき、私の中で、カチッとパズルのピースがはまったような感覚が起きた。

彼は――黒髪短髪の爽やかな見た目に、座っていても身長百八十センチ前半はあるだろうと察することができる、いかにもモテそうな風貌の青年――おそらく私の記憶の中にいる人物だ。記憶の中の彼は何と云うか、ダサかった。チビで眼鏡で目立たない、そんな人物だったはずだ。

私は声を掛けようか躊躇った。目の前にパンドラの箱を差し出されたらきっとこんな気分だろう。好奇心に流されるまま蓋を開けてしまえばもう後戻りはできない。このまま彼に気がつかれないうちに、そっと席を立ったほうがお互いのためのはずだ。そう思った矢先、彼は「あれ？」といった表情をした。

「――あの、もしかして桜中出身ですか？」

いつもの私なら、澄ました顔で「いいえ」と答え、颯爽とその場を去ることが出来た。だけど、探偵小説の衝撃のせいとその日の私はパンドラの誘惑に負けて「そうです」と答えていた。

「やっぱり。俺、男子テニス部にいた田島です。目立たなかったので覚えてないかもしれないけ

れど。女子テニス部の山戸さんですよ」

目を細めてにっこり笑うその笑顔は、記憶の中の彼としっかり結びついた。

中学時代、私達は隣り合ったコートで毎日練習をしていた。とは言っても、男女別々の先生が顧問を受け持っていたため、一部社交的な生徒を除いて交流は無いに等しい状態だった。

私と田島くんはその「社交的」ではないメンバーだったし、同じクラスになったことは一度もない。だけど私は、男子テニス部の中で一番背が低くて眼鏡の田島くんが、大きなラケットを手にコートの中を懸命に走り回っていたのを何となく覚えていた。

「山戸さん、今もテニスやっているの？」

「ううん、テニスは中学のときだけ。高校からは帰宅部。元々好きで始めたわけじゃないし」

「そうなんだ」

「うちはお姉ちゃんがテニス部だったから。入学した直後に先生に誘われたの。特に入りたい部活があったわけでもなかったから、そのまま入部したんだ」

「そういえば山戸さんのお姉さん、有名だったよね。俺らが中学入った年には卒業していたのに、いろいろと噂が残っていた」

私達はそのあと、ちょっぴり今の生活のことを話し——彼は都内にある大学の理学部で学んでいると話してくれた——後はずっと、お気に入りの本のことを話した。

「元々ミステリが好きだったんだけど、たまたま図書館に行ったときに借りたやつがなくって」

手元の小説を眺めながら話してくれる。

「たまたま目にしたこの本を借りたんだ。そしたらはまっちゃって。めちゃくちゃ伏線が張られているけれど、最後には綺麗に回収されるじゃない。それが気持ち良くて——」

一見落ち着いた様子で話しているけれど、私は気付いていた。伏せられている瞳の奥に、ちらちらと暑い炎が燃え上がっているのを。

私は確信していた。

この人とは趣味が合う——と。

夢中になって話しているうちに時間はあっという間に経ち、すっかり日が暮れてしまっていた。私達は連絡先を交換してカフェを出たところで別れた。夕闇に沈んで行く帰り道、私の心はずっとフワフワした、気持ち良い高揚感でいっぱいだった。

午前中の講義が終わった昼休み。最近毎週金曜日のお昼、私と親友の優はほぼ学食でご飯を食べている。残りあと半日の授業を受ければ今週は終わりだ。窓の外に見える樹々は瑞々しい緑で、蝉の声があちらこちらから聞こえるようになってきていた。もうすぐ大学に入って初めての夏休み。――その前のテストを無事に乗り越えることができれば、の話だが。

「今更だけど、大学生って二ヶ月も休みがあるから凄いよね」

と、辛口のカレーライスを頬張りながら優は言った。汗をタオルハンカチでトントンと押さえながらも、美味しそうにスプーンを口に運んでいる。

「そうだね。でもきっとバイト三昧だよ。稼げるときに稼ぎましょうってことでさ」

私の返答に優は笑った。

「でも良かったね。花屋さん、一ヶ月のお休みをオーケーしてくれて」

内心、良心的な店長さんだなあと感心していた。私のバイト先のファミレスは、学生はここぞとばかりにガッツリとシフトを組まれていた。

――まあ優の場合は一人暮らしで実家が遠いという事情を考慮してくれてのことだろうが。

「その間にね、他のバイトさんたちが私の分も入ってくれることになったんだ」

「他の人って、例の悟さん？」

「そう。悟さんがね、凄くたくさん入ってくれているの」

私は、アレと思い首を傾げた。

「彼って、そういえば三年生じゃなかった？ 余計なお世話だけど就活大丈夫なのかしら」

「うん。夏休み後半から始めるみたい。だから後半は私が戻って来ていっぱい入ることになったの」

何だか嬉しそうだ。一時は「失恋だ」と言ってへこんでいたが、すっかり元気を取り戻した様子だ。私は深く突っ込まないことにして、天ぷら蕎麦のてっぺんに乗っていた海老をかじった。ぷりぷりした海老の風味が口いっぱい広がっていく。蕎麦をすすってから、私は思いついたことを口にした。

「長野ってお蕎麦有名だよな。水と空気が綺麗なところの食べ物は美味しいっていうし。食べてみたいな」

「あのさ、留美さえよければ遊びに来てよ！」

思いもよらない優の反応に、私は少し戸惑った。

「え？ で、でも……。いいのかな、そんないきなり」

「もちろん。私の生まれ育ったところ見て欲しいもの。うちに泊まれるから、ぜひ遊びに来てよ」

スケジュール帳を開いてみると、八月の終わりに三日間何も予定が入っていない期間があった。それを見て、横から一緒に覗き込んでいた優が蛍光マーカを取り出すとおもむろにその三日間を囲んで笑った。

「じゃ、ここで決まりだね」

いつになく積極的な彼女に引っ張られ、思いがけない形で私の長野行きが決定した。

田島君とはカフェでの久々の再会以来、時々メールをしている。主な内容は面白かった本の情報交換。メールにすぐ返信が来なくても、不思議と気にならなかった。「好きな物が同じ」という共通点があるとはいっても、それまで全く接点の無かった相手である。いつ何時、この関係があっさりと終わりを告げても驚くことじゃない。――そう思っていた。

テストを無事に終え、とうとう待ちに待った夏休みがやってきた。七月最後のこの日、アスファルトの道路の上で蜚蜚がゆれている。そんな攻撃的な日差しの中を到底歩く気にはならず、私と優は最後の授業のあと、大学の最寄り駅近くにあるカフェの涼しい店内でのんびりと開放感を味わっていた。

「まだ私たちは十代だからお酒を飲めないけどさ、もし二十歳を越えていたらよ？ この開放感の中で一杯やれたら最高だと思うのよね」

私の話にも優は桃のソーダをストローでクルクルとかき混ぜながら、ふうとため息をついた。

「そうだね。ビアガーデンとか行けるようになったらきっと楽しいよ」

大人は大人の楽しみがあるよね、などと語り合っていると、ものすごい勢いで店の扉があいた。見ると、二人組の女の子が真っ直ぐこちらに向かってくる。――正確に言えば、一人がもう一人を無理矢理引きずっている。

それが誰だか気づいて私は思わずため息がでた。引きずられている方はラクロス部の松下。私に向かって片手を顔の前で立て、必死に口をぱくぱくさせている。どうやらゴメンと言っているようだ。鬼の形相で松下を引きずっているのは橘エリカだ。顔立ちはキレイだが性格は結構キツイ。優も苦手と言っていた。そういえばカフェに着いた頃、松下から「今、どこにいる？」とメールが来ていた。きっとエリカに居場所を問いつめられたのだろう。

テーブルに辿り着くやいな、エリカはいきなり優の前にあったコップを掴み、一気に水をガブ飲みした。あっという間にコップを空にすると、潤った唇を一舐めしピタッと優に視線を合わせた。

「――篠原さん。確か花屋でバイトしていたよね」

「う、うん。それが何か……」

突然現れた苦手意識を持つ相手に自分のコップの水を全部飲まれ、優の顔は完全に引きつっている。

「緊急に花束が欲しいの！ 友達のサプライズに必要なのよ。お願い篠原さん。一緒にきて、選んで頂戴！」

お願いと言っておきながら返事を待たずに優の手を掴むと、エリカは来た時と同じの勢いで店を飛び出していった。後に残された私と松下はなすすべなく、二人の後ろ姿を見送った。

(エリカって、まるで台風みたい)

私がなかなか気を取り直せずぼんやりしているうちに、松下は優の座っていた席に腰掛けると遠慮なくソーダに口を付けた。

「大丈夫かな、篠原さん」

首元に引っ掛けたタオルで、無造作に短髪やおでこの汗を拭いている。

「悪かったね、二人でのんびりしていたのに。部活に行こうと教室出たところで鉢合わせてさ、篠原さんの居場所を教えなさいって、そりゃもうおっかない顔をして迫ってくるもんだから。留美と一緒にだと思ってつつい……」

そのとき、ブブ……と携帯が震えた。優からメールだ。

『留美、橘さんとEdenzに来ているよ。花束一緒に選んだらそのままバイトに入ります。申し訳ないけれどお会計頼んでもいいかな、次に会った時にお返しします』

両手を合わせて謝っている、可愛らしいネコの絵文字付き。きっと、いち店員としてしっかり対応しているのだろう。優は実際しっかりしているからだから大丈夫だ。松下にもメールを見せると、彼女もほっとした様子だった。

「良かった。今度お詫びにご飯でも連れてくよ。悪いけど私もラクロスの練習あるからこれで」

爽やかに去って行く松下を見送って、私はすっかり氷が溶けて薄くなったアイ스티ーに口を付ける気にもならずため息を吐いた。

（さあ、これからどうしよう？）

まだだいぶ日も高いし、せっかくのこの開放感を満喫しないのももったいない。本屋さんでもブラっこうなぁ……とぼんやり考えていると、また携帯が震えた。優かしら、と画面を見ると光っている文字は『田島君』だった。

『良かったらお茶でもしませんか。Coko caféで読書しています。都合が宜しかったらぜひ』

そこには、短くて飾り気のない文字が並んでいた。

田島君はCoko caféの、一番奥の席に腰掛けていた。外と比べると店内は照明が薄暗く、いくらか涼しげに感じる。私が近づくと、彼は読んでいた本から顔をあげて「おう」と言った。私は彼の正面に座り、チーズケーキとアイスコーヒーを注文すると、彼の読んでいる本を覗き込んだ。

「宇宙の本だよ。いつもこういう本ばかり見てる」

照れ隠しなのか苦笑いしつつ、ブラックホールや惑星のことを説明してくれる。だが、なかなか難しいテーマだ。私が苦悩の表情を浮かべていることに気付くと、今度は図を描いてくれた。よくわからないのに、何だかだんだん楽しくなってくる。

「――で、こんな感じに銀河はたくさんあって繋がっているんだよ」

「ふーん。知らなかった。宇宙、面白いねえ。――それにしても田島君がこんな面倒見いい人だったとは」

何気なく言った一言にどうやら彼は照れていて、顔を赤らめながらそんなこと無いよ、などと言っている。その様子を見ていると、可愛いなあ、と思っている自分に気がついた。

(あれ、なんかおかしくない？ 同級生の男子を可愛いってどういうことよ)

一人思考の迷宮に入りこんだ私に気付くことなく、彼は瞳を輝かせて話を続けている。と思いきや、ふと話題を変えてきた。

「そういえば山戸さん、もう夏休みでしょ。予定決めた？」

「うーん。今のところバイト三昧。……て違う、長野だ。長野に遊びに行くことになったんだ」

私は簡単に優の話と、彼女の実家に行くことになったいきさつを話した。

「へー、いいな。きっとキレイな星空が見られるよ」

「運が良ければ流れ星も見られるって」

「それなら双眼鏡を持っていくといいよ。きっと役に立つ」

田島君の提案に、私は姉の部屋に小さな双眼鏡が置いてあったことを思い出した。

「そうか。お姉ちゃんに聞いてみよう。――田島君は何をするの？」

「俺は……。恥ずかしいな、笑わないでね？」

照れながら話してくれた計画は、バイト代で購入した中古のバイクで天文台を巡る旅をする、というものだった。荷物は出来るだけ切り詰めて最低限。コインランドリーやユースホテルなんかを利用してお金も節約。それでどこまで出来るのか試してみたい、ということだった。

「でも、天文台って大抵山の中にあるんじゃない？ 道に迷ったらどうするの？」

「うーん、スマホで位置を確認しながらかなあ。あ、でも山の中だったら電波こないか……」

あはは、と笑っている彼を見ながら私は内心こんな人だったんだな、と驚いていた。

「明日から行くんだ。一ヶ月くらいでブラッとまわれたらな、と思ってね」

「そうなんだ。帰ってきたらすっかり山男になっているかもね」

私たちは一瞬想像すると、お互い顔を見合わせて笑った。

「宇宙ってそんなに魅力あるんだ。私も興味がわいてきたかも。ブラックホールとかは難しそうだけれど。星座を知っていたら観測するのが楽しそう」

「星座は空の地図だからね。ちなみに夏に見える星座はねー」

それから長いこと、彼は星座について講義してくれた。夏の大三角形を目印に、こと座、わし座、そして別名のノーザンクロスと呼ばれている、天の川の上を舞うはくちょう座。

「はくちょう座なんて優雅に翼を広げた姿をしているけれど、あれは女好きな神様がね、奥さんがいるにも関わらずに別の女性に恋をしてお忍びで会いに行くっていう姿なんだ」

「そうなんだ……」

ギリシャ神話に出てくる神様たちは何だかとっても人間味がある。恋をしたり嫉妬をしたり。私はもっと星座について知りたくなってきた。

「ねえ、本屋さん行かない？」

突然の私の提案に一瞬彼は驚いた表情をした。でもすぐにいいよ、と笑った。

私達は駅前のファッションビルに入っている大きな本屋さんへ向かうことにした。夕方になりいくらか暑さは和らいできたが、それでも外はうんざりするような熱気があった。

私はいつも持ち歩いている日傘をポンッと開いた。黒地にレースで縁取りされた傘は、しっかりと太陽光を遮断してくれる。これを差すか差さないかでは、感じる暑さが全然違うのだ。猛暑を乗り切るための強力なアイテムの一つだ。

後ろを振り返ると、吹き出す汗を厭わずに本と鞆を抱えて田島君がついてくる。

(しょうがないなあ)

私は彼の隣に並ぶと、背伸びして日傘に入れてあげた。

「いいよ、俺平気だし。山戸さん全然入ってないじゃん」

小さな日傘では、二人分しっかり覆うことは到底不可能だ。私の頭から半分は日の元に晒されてじりじりと熱くなってきた。

「駅前までだし。日射病になったら大変なもの」

私がそう言うと、彼はちょっと考えてひょいと私から傘を奪った。

「では、俺が持ちましょう」

そう言うと、すたすた歩いていってしまう。びっくりして立ち尽くしている私に「ほら。暑いから、早く行こう」と、声をかけながら。何だか一本取られた気分である。私はむくれ半分照れくささ半分で、彼の後を追いかけた。

お店につくと、店内には本を読んでいるお客さんがたくさんいた。マンガや雑誌の棚も気にはなったが、田島君が迷い無く進んで行くので仕方なく後についていく。

宇宙関連の本は最奥の一角あった。隣は数学や物理の専門書が並ぶ棚で、ほかの場所と比べると本を眺めている人の姿は少ない。

「どうなのがいいのかな。何かイメージある？」

「えっと……。星座の写真とか、神話が載っているようなヤツ。観察するときにあったら便利そうな……」

「なるほどなるほど」

上から下まで一つ一つ丁寧に眺めながら、どれが良さそうなのか見ている。私も隣に立って眺めていたが、分厚くて難しそうなタイトルのものが多い。棚に陳列されている物から目を離して、何となく平積みされている方に目をやった。新刊や売れ行きの良い本たちに混ざって、サイズが大きい写真集も置いてある。そのうちの一冊の表紙に私は目を奪われた。

それまで私にとって夜空というものは黒に近い色だった。そこに点々と星が輝いている、そんな程度のイメージだった。その写真は、波の無い穏やかな海の背後に、幾千万の星々が大小様々な光を放って浮かび上がっている。そして銀砂を流したような見事な天の川が天上から海に注がれるように流れている。

「これは凄いね、めちゃくちゃキレイだ」

いつの間にか田島君も隣に来て覗きこんでいた。

「――星ってこんなにあるんだ」

「長野なら、これに近い星空が見られるよ。でも持って行くにはその写真集じゃ大変でしょ。これくらいのやつがいいんじゃないかな」

差し出された本は、子供用の図鑑でちっちゃくて薄い。中を見てみると、星座の写真と、それにまつわる神話。そして観測時のポイントが解説されている。サイズは持ち運びしやすいし、何より情報量がありすぎるのは初心者の私にはキツイ。これは私にピッタリのガイドブックになってくれそうだ。

「ありがとう、これにするよ」

顔をあげた私を見て、彼は嬉しそうに頷いた。

本屋から出た私達は買った本をすぐに眺めたかったのでカフェに戻ることにした。いつの間にか空にはどんよりと分厚い雲が立ちこめ、空気はじつとりと重く、今にも夕立が降り出しそうだった。

「急いだほうがよさそうだね」

私がそう言った途端、ざあっと音がしたかと思うと滝のような雨が降って来た。

「やばい、降って来た！」

私の日傘では到底役に立ちそうにない激しい雨だ。

「山戸さん、あそこ」

田島君が指差した先にはシャッターの降りたタバコ屋さんがあった。少し屋根がせり出していて雨宿りできそうだった。私達は急いでその下に駆け込んだ。

避難するやいなや、私は買ったばかりの図鑑の無事を確認しようと、鞆の中を確認した。本は少しばかり濡れてしまっていたけれどほとんど濡れていなかった。ホッとしてタオルを取り出すと、頭を拭きながら豪雨で真っ白に見える通りを眺めた。

「土砂降りだねえ……」

「うん。丁度雨宿りできる場所があった」

彼は小さなハンカチしか持っていなかったようだ。一生懸命雨の雫を拭き取っている。

「これ使いなよ、私もうだいたい拭き終わったから」

「いいって」

「遠慮しないでよ。旅の前日なのに風邪でもひいたらどうするの」

なかなか受け取ろうとしないので、私は無理矢理タオルを押し付けてしまった。渋々受け取って顔を拭き始めた彼を見てから、私は再び通りに視線を向けた。豪雨はしばらく止まなそうにない。

「――山戸さん。中学の時のこと、覚えている？」

急に田島君が口を開いた。

「俺ら、一回だけ話したことあるんだよ」

激しい雨音の中なのに、不思議と彼の声ははっきり聞こえる。私は妙に息苦しかった。答えたくなかった。けれど、通りを見つめながら呟いていた。

「――覚えてるよ」

田島君は、ちょっと笑ったかもしれない。

「俺弱くて。試合に出てもほとんど勝てなかったんだよね。でも三年生の引退する直前に出させてもらった練習試合で粘り勝ちしたんだ。あのとき山戸さん、今まで俺と一度も話したことがなかったのに試合が終わってコートを片付けているときおめでとうって言ってくれたんだよね」

それは、真っ赤な夕焼けの頃だった。激しい試合でボロボロになった田島君は、片づけられたテニスコートの隅で、一人ベンチに座っていた。一番慎重が低くて、でも誰よりも真剣に練習を続けていた田島君が勝ったその日、私は自然に声をかけた。

突然クラスメイトでもない女の子に話しかけられた彼はそのとき何も答えなかったけれど、目をまん丸くしていたのを覚えている。試合で真っ赤に上気したほっぺたが更に赤く、夕日の色に染まっていった。

「――俺さ、山戸さんと再会できて良かったよ」

呟かれた台詞はあの日の田島君が答えてくれたような気がして、私は通りを見つめたまま「うん」と言った。

しばらくすると、雨は降って来たときと同じように突然止んだ。私達はカフェにはいかに、そのまま帰ることにした。またメールするから、と言った田島君に手を振って別れた後、空を見上げると見事な虹がかかっていた。

バイト三昧の日々が続き、毎日があっという間に過ぎていく。田島君は旅先から時々写真付きのメールを送ってくれた。時には電波の届かないところにいるのか連絡が途絶えるときもあるけれど、元気に旅を楽しんでいるようだ。天文台の事や旅先で起きた出来事を一言二言そえてくれる。メールが届くたび、まるで私も一緒に旅をして新しい発見をしている気持ちになった。私から送ることは東京の日常や面白かった本、そんな内容ばかりだ。でもメールが返ってくることが嬉しくて、些細なことでも送りたいかった。そうしているうちにあっという間に八月も終わりに近づき、とうとう長野に行く日がやってきた。

新幹線から松本の駅に降り立つと、東京のじめじめした空気とは全く違う、爽やかな風が頬を撫でた。

「おーい留美ー！」

改札を抜けると、麦わら帽子を被り真っ黒に日に焼けた優が私にかけよってきた。

「久しぶり、元気だった？」

飛び跳ねながら私の両手を握ってぶんぶん振り回す。私も負けじと、

「元気元気！」

と再会を喜んだ。ちょっと離れたところで私たちをにこにこ見守っている、ころころとした体形の優しそうな女性がいる。

「お母さん。このこが留美がだよ。留美、こちら私のお母さんです！」

優の紹介に、私は慌てて姿勢を正した。

「初めまして。山戸留美と申します。優さんにはいつもお世話になっております」

「あなたのこと優からたくさん聞いていますよ。仲良くしてくれありがとうございます。東京行って心配してたけど、良い友達ができたみたいで安心したのよー」

おばさんはつやつやのほっぺたを真っ赤にして笑っている。

「それじゃあ、立ち話もなんだし早速うちに行きましょうか。みんなお待ちかねよ」

近くに可愛らしいレモン色の軽自動車が止めてあった。よく見ると、後ろの座席から柴犬が一匹こちらを覗いている。

「可愛い！」

「でしょ？ 花っていうの。女の子だよ。人懐っこいからね。連れて来たんだ」

おばさんが運転席に乗り込み、私たち二人は後ろの席に座った。花ちゃんはおばさんの隣だ。大人しく座っているが、私たちが気になるのかしきりに後ろを振り返る様子がとても可愛い。少し緊張していたけれど、花ちゃんのおかげで気持ちが随分と楽になった。

車は市街地を離れていく。かわりにどんどん山が近づいてくる。

「お母さん、兄ちゃんいつ帰ってくるの？」

「まさき？ 明後日には着くって言ってたよ。実験が忙しいからって、ねえ……」

休みなんだからさっさと帰ってきたらいいのに、と言うおばさんを優はまあまあとなだめて

いる。

「優、お兄さんいたの？」

私の問いに、彼女はコクンと頷いた。

「六つ年が離れているんだ。先に東京に出てきてるんだけどね」

「頼りにならないお兄ちゃんなんですよ。実験バカっていうんですかね。妹が上京してくるって
いうのに。ほったらかしなんだから」

と、おばさん。

「兄ちゃんが好きなことやってるからさ。邪魔しちゃ悪いかなって思って」

おばさんに聞こえないようにコソッと優が耳打ちした。でもその表情は申し訳ない、と思っ
ているそれというよりはどこか凜としていて、本当のところは一人でできるところまでやってみ
たいという気持ちだったのかな、なんて私は思った。

やがて、車はまばらな家の間の路地に入っていく。青々とした田圃が続く細道を抜けた先に、
東京じゃあ考えられないほど広い家があった。

「さあさあ、着きましたよ」

(一体何部屋あるのだろう)

屋根には立派な瓦が乗り日の光に鈍い光を放っている。そして何より私を驚かせたのは家の後
ろ側だ。そこは完全に山だったのだ。

「たまに虫とか入ってきちゃんだけどね。みんな慣れているから、大丈夫だよ」

車から花を降ろしながら優が言った。

「すごい。こんなに広い家、昔社会科見学で行ったとき以来」

蝉の大合唱が耳に迫ってくる。優はここで育ったのか、と一人感慨に耽っているとガラガラ
と音を立てて引き戸が開き、ぼさぼさの髪に無精髭を生やした眼鏡の男性がのっそりと現れた。

「あれ、まさき。あんたいつ帰って来たのよ」

おばさんが驚いて素っ頓狂な声をあげた。

「あー、思ったより実験が上手く行ったからさ。夜行バスでそのままきちゃったんだよ」

「あんたって子は。来るなら来るで、連絡くらい寄越しなさいよ」

おばさんに文句を言われて頭をぽりぽり搔いていた男の人は、悪びれた様子なく大きく伸びを
した。

「兄ちゃんお帰り！」

飛び出していった優に飛びつかれて、はじめて私に気付いた。

「優、久しぶりだなあ。こちらのお嬢さんは友達かい？」

「初めまして。山戸留美と申します。大学では優さんにお世話になっています。」

「これは丁寧に。こんな格好ですみませんね。篠原まさきです。東京の大学院で農学をやっ
ています」

差し出された手はごつごつとしている。普段この人が畑でクワをふるっている姿が容易に想像
できた。

「優。留美さんを大部屋に案内してさしあげて」

花の足を拭いているおばさんに言われ、私は優のあとに続いて玄関をくぐった。

外から見て思った通り、中は相当広い。板の間の廊下を歩いていくと窓という窓は開け放され、東京のじめじめしたそれとは違う気持ちの良い風が家の中を吹き抜けている。

「二人とも学校の話聞かせてよ。優は東京でちゃんとやっているのかい？」

「大丈夫。友達も出来たし学校生活も慣れたよ。バイトも始めた。一人でしっかりできているよ。……兄ちゃんは相変わらず忙しいんでしょ」

ちょっぴり恨み節を混ぜて優が答える。

「そうだなあ。実験は予定通りに行かないからな」

まさきさんは気にすることもなくのんびりとした調子だ。

「まあ、大学にはいるから遊びに来いよ。留美さんも一緒にね。うちの大学は面白いぞ。東京なのに、豚とか牛が歩き回っているんだから」

そんなのあんまりこの辺と変わらないじゃん、と優に笑いながらつつこまれている。

「そうだ、兄ちゃん。留美を夜にね、高原に連れて行ってあげたいの。長野の星空を見せてあげたいんだけど。車出してくれる？」

「星？ ああ、今日は雲も少ないから観測に良さそうだね。いいよ。夕飯食べ終わったら、行ってみようか」

やったあとと喜ぶ優の隣で、私の心もわくわくが高まっていく。

長い廊下の先に何十畳かわからないけれどとても広い畳の部屋があった。足の短い長テーブルが置かれ、所狭しとラップのかけられたお料理が並べられている。私達がはじっこに座っておしゃべりをしていると、近所に住んでいる親戚の方々がどんどん集まって来た。

「まさき、あんた全然こっち帰ってこないけれど、元気にしてるのかい？」

「あなたが留美さんね。優と仲良くしてやってね」

どうやら東京から優の友達がやってきた、ということとまさきさんが久々に帰って来たという噂を聞きつけて来たらしい。私は知らないおじさんやおばさんに話しかけられて目を白黒させていた。

「もう。留美さんはまだこちらについたばかり何だから、そんなに話しかけたら大変でしょう」

おばさんと、おそらく優のおばあさん（にこにこしている笑顔がとても良く似ていた）がたっくさんのお料理の乗ったお盆をどんどん運んでくる。

「留美さん、遠慮しないでいっぱい食べて下さいね」

おばさんが大きめのお皿にちらし寿司や、山菜の盛り合わせなどをよそってくれた。

開け放たれた窓からは涼しい夕方の風に混ざってカナカナとヒグラシの声がする。どこか切なげ蝉の声が夏の一日の終わりを不思議な気分盛り上げる。

「留美、これは絶対に食べて。山賊焼きっていうの。長野の名物よ」

大きな唐揚げを指さした優に言われるまま、私は山賊焼きを口にした。とってもジューシーな

鳥の味が口の中に広がっていく。

「うん、美味しい！」

「鳥を揚げるっていうのが、取り上げるって言葉と一緒にだからこの味になったんだって。おもしろいよね」

優は嬉しそうに笑っている。私は田島君に教えてあげようと思い写真を撮った。

ご飯はどれもとても美味しかった。私達はお腹がはち切れるくらい食べた。このまま眠ってしまっても良い気分だったが、冒険が待っていると思うとじっとしてなどられない。

大にぎわいの夕飯のあと、私たちはすぐにお風呂に入り出かける支度をした。

「山の上は夏でも寒いよ。何か羽織るものを持って行ったほうがいいよ」

優の話を参考に、私はリュックサックに必要と思われるものをつめて行く。パーカー、携帯、双眼鏡、そして星座図鑑。

荷物を持って外へ行くと、既にまさきさんが待っていた。彼もお風呂から上がって来たようで、髭も剃ってこざっぱりとした様子だ。そばには大きなワゴン車が止まっている。

「これは俺の移動式の部屋といったところでね。中はごちゃごちゃしてて狭いんだけど気にしないでくれ」

「兄ちゃんずっとこっちに置いてるけど、東京に持って行く予定なの？」

「うん。やっと向こうで止められる場所見つけたんだ。長年俺が居ない間父ちゃんに面倒見ってもらってたけど、やっと連れていけるよ」

まるで遠距離恋愛をしている彼女に語りかけるかのように目を細めて話ながら、ドアを開けてくれた。後部座席に私と優が乗り込む。

「よし、じゃあ出発だ！」

夜の山道は車通りが少ない。ヘッドランプに照らし出されるのは黒々とした樹々たちだけだ。夜風を堪能したかったが、虫が飛んでくるといので高原にたどり着くまでは我慢だ。くねくねと曲がる道を、車はぐんぐん登って行く。まるで天に向かっていているみたいな気持ちになる。

東京からの移動してきたことと、お腹いっぱいご飯を詰め込んだ私はいつしかうとうととしていた。優とまさきさんは、私を気遣って小声で東京の生活を話している。それさえも子守唄のようで、心地よい幸福感に満たされていた。

(一体どんな光景が見れるのだろう)

頭の中ではたくさんの星座達が楽しそうに宴会をしていた。

「――留美。着いたよ、起きて」

そっと優に肩を揺らされて私は目を覚ました。余りの心地良さに、涎を垂らして眠りこけていたようだ。慌てて口元をこするとパーカーを羽織りながら車の外に飛び出した。

「――わぁ」

さえぎるものが何一つない広い、そして濃紺の夜空。そこには無数の星が輝いている。冴え冴えとした空気の中で瞬きの音が聴こえてくるかのような感覚。

(これは、東京で見上げている空と同じものなの?)

私はいつしか寒さを忘れていた。

「……星って、こんなにたくさんあったのね」

隣にたった優も、じっと夜空を見つめている。

「綺麗でしょ？ 空気が澄んでるし、松本の町からも随分遠いからこれだけ見えるんだよ」

優の言う通り、ここは町の灯りというものから無縁の場所だった。少し離れた場所に民宿があるという話ではあったが、木々に遮られていてわからなかった。

私たち二人はワゴン車の僅かな明りの下で図鑑を開き、星座を探しはじめた。

「昔、兄ちゃんに夏の大三角形は教えてもらったの覚えているけれどなあ。あ、あれかな？」

「どのへん？」

まさきさんは一人車の後ろでゴソゴソとやっていたが、私たちの様子を見て、まるで姉妹みたいだな、と笑った。

「兄ちゃん何やってたの？」

「何って、コレさ」

まさきさんは私たちに熱々のマグカップを差し出した。ふんわりとコーヒーのいい香りがする。

「この車にはキャンプ道具一式準備できてるんだ。山頂は夏でも寒いから温かい飲み物は必需品だからね。椅子もあったから。さ、こっちにおいで」

車から少し離れたところに、低い角度の背もたれがついた椅子が並んでいた。まさきさんに促

されて座ってみると、

「――すごい」

天上に広がる星空が一望できる。

「これだったら楽に観察できるからね。それからお母さんがおやつにつて、農協で買ってきたチーズケーキくれたよ。チーズ屋さんが作ってるらしくて、地元で美味しいって評判なんだって」

その言葉に優の目が探偵のように鋭く光った。

「……兄ちゃんやけに気が利く。もしかして、彼女でもできた？」

まさきさんはいたって平静である。

「俺は星空観察するときはいつもコーヒーと食べ物は準備してるの。ほら、いいから座りなさい」

優は怪しい、とブツブツ言いながらもそれ以上は追及せずに大人しくコーヒーと切ってもらったケーキを受け取った。

「はい、留美さんもどうぞ」

「ありがとうございます。なんだかとても贅沢な気分です」

まさきさんは、おっとり微笑んだ。

「綺麗な星空に美味しいもの。それだけあれば、大抵のことは充分ですよ」

私たちはコーヒーとケーキを堪能しながら夜空を眺めた。

「わかるかな、留美さん。あれが夏の大三角。――そして、天の川だ」

まさきさんが指さしたそこには一際輝く三つの星が見える。天の川は大三角に重なるように輝いていた。

(これが、天の川……)

遠いところにあるはずなのに、伸ばした指先で触れることが出来るような存在感。空を大きく流れるそれは確かに天の川なのだ。

私は不思議な感覚を味わった。星は、私たちのはかりしれない過去からそこに存在している。それはガスや塵の凝縮した<物>であり、そこに意志はないはずである。でも今私の目に写るそれらは、何か大きな大きな<者>の意を携えているように思わずにはいられない。

なぜならどうしてただ<物>を見ているだけのはずなのに、こんなにも感情を揺さぶらるのだろうか。深い、優しい眼差しに見守られているような気持ちになるのはなぜだろうか。いつしか私の目は、寒さではないものによって潤んでいた。

(星座を作った人たちも、今の私と同じような気持ちだったのかな……)

冷たい空気の中、静寂の中、私は見上げた空に吸い込まれそうな感覚にただ身を任せた。

「あそこに見えるのがはくちょう座だ」

まさきさんの指先には、天の川の上を大きく翼を広げ、優雅に飛翔する姿のそれは、確か好色な神様の姿ではなかったか。

(前言撤回。私だったらもっとロマンチックな物語を作るわ)

昔の人のセンスがおかしくて思わずクスッとしてしまった。

「それではその少し下に見えるのが、織り姫と彦星のベガとアルタイルですね」

デネブにベガとアルタイル。夏の第三角を見つけた、と思ったそのときキラリと一筋の光を見た私の心は跳ね上がった。

「今の見た？」

まさきさんがにこにこしながら言う。

「見た！」

「流れ星！」

私たちの歓声に応えるように、空にまた一筋光が流れる。

私は星空を見上げながら携帯を開いた。今感じていることを田島君に伝えたかった。いつか一緒にこんな空を眺めたい。そして星や宇宙のことを心ゆくまで語り合ってみたいなあ、と思ったのだ。文字は打ち終わったけれど送信ボタンは押さなかった。

(なるようになるわ)

高まりかけた鼓動を抑えるように私は星空を眺める。そこには確かに見守っているよ、と言っているような輝きがあるのだ。